魔海の宝

南　洋一郎

少年倶楽部文庫29
魔海の宝

昭和51年4月16日 第1刷発行

著者 南洋一郎
発行者 野間省一
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号 112 振替 東京8－3930
電話 東京(03)945－1111(大代表)
編集 株式会社第一出版センター
印刷 図書印刷株式会社
製本 有限会社 千曲堂

Printed in Japan ©池田宣政 1976
落丁・乱丁の際はおとりかえいたします。
定価はカバーに表示してあります。 (セ)

少年倶楽部文庫
29

魔海の宝

南　洋一郎

講談社

※目次※

海底の怪音　七
沈没船の秘密　一一
海の大秘密だよ　一六
やっ！　小函の中　二〇
豊太閤の秘宝　二五
船を護る猛魚　三〇
あやしい潜水夫　三七
魔海の地図　四二
大魔海いずこ？　五〇
忍びよるあやしい人影　五五
宝島の地図　六〇
スペイン海賊の記録　六五
怪船あらわる　七〇
残念！　黒潮丸の運命　七四
雄吉の冒険　七九
あっ、怒濤にのまれた！　八四
大衝突　八九
孤島に漂流　九二
やっ、怪船だ！　九七
大洞窟の怪　一〇四
大洞窟の怪光　一〇九
鉄拳の誓い　一一三
怪船の上　一一七
必死の力漕　一二〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

危機一髪　一三五
おお、意外意外！　一三九
隠れたる海の英雄　一三四
ああ、黄金の鍵だ　一三八
ダンカン一味いずこ　一四二
すばらしい銀鯨号　一四八
ああ、黒潮丸！　一五二
ああ、雄吉いずこ？　一五八
海底に闘う　一六二
孤島の信号旗　一六六
黒い海庭の通り魔　一七〇
空飛ぶ潜水艦　一七七
雄吉、捕わる　一八二
海底に闘う　一八八
雄吉の人質　一九四
喜びの握手　二〇〇
艇長の大理想　二〇四
海底の城壁　二一〇
ああ、古武士の最期　二一四
ああ、ついに大魔海　二一八
大うず巻きの中心へ　二二二
魔海の怪　二二五
ああ、あやしい大鉄箱　二三一
おお、輝く秘宝　二三四

装幀　安野光雅
挿絵　梁川剛一

魔海の宝

海底の怪音

「おやッ、今のはなんだろう」

海底三十メートルの岩にしがみついていた雄吉は、潜水マスクのなかで耳をすました。

ここは濠洲の木曜島近海の名高い真珠の漁場である。そして、雄吉は、日本内地から出稼ぎに来ている、黒潮丸という真珠採り船の少年潜水夫である。年はまだ十五、からだはちびだがまっ黒けに引きしまってピチピチしている。仕事にかけてはおとなにも負けていない。

きょうも仲間といっしょにもぐったのであるが、いつも静かだった海底に、いま、はげしい底流れが走りはじめた。海底のあらしである。まき上がる砂とうずまくごみのために、あたりは濃霧が立ちこめたよう、五、六メートルはなれた岩も海藻も青黒くぼうっとかすんでいる。

何万ともしれない小魚の大群が、あらしを避けるために一生懸命逃げてゆく。そのまっ黒いかたまりが雲のようにうずまいて、頭の上が暗くなる。その中でときどき、ピチリピチリとうろこがひらめいている。おおきな鰹が五、六匹、肝をつぶしたように眼を光らせて、雄吉をにらみながら通りぬけた。

これは恐ろしいきざしである。海底がこんなに荒れるときには、きまって五、六日めぐらいに海上にも大しけが来るのだ。

が、それよりも気味の悪いのは……

「あッ、また、聞こえた」

ギ、ギーッ……ギ、ギーッ。

音は雄吉のしがみついている岩の向こうの、深い谷底からわきあがってくるらしい。

「なんだろう」

はじめは、仲間が海底で信号するために岩をたたく音かとも思った。が、ちがう。もっと耳にしみとおる、なんだか人の心を引きつけ、おびきよせるような陰気なひびきである。

雄吉はゾーッとした。

いままで迷信深い船乗り仲間から、船幽霊だの海坊主だのと、さまざまの海のふしぎを聞かされるたびに、雄吉は鼻で笑ってきたのだが、ここは三十メートルの海底だ。しかもひとりぼっちである。雄吉はきゅうに心細くなって、生命綱を引いてひきあげ信号を船に伝えようとした。生命綱を三度引くと、すぐひきあげてくれることになっているのだ。が、そのつもりで岩からはなした右手に、しっかりと握っているやすに気がつくと、

「いけない」

と思った。

そのやすは雄吉の父の形見である。

「おとっさんに笑われるぞ」

雄吉の父はすばらしい潜水夫であった。雄吉といっしょに黒潮丸で働いていたのであるが、去年、木曜島のケンネジーの港町へ上陸したままゆくえ不明になってしまったのである。

船長はじめあらゆる手をつくして探したが、神隠しにあったように、父の姿はその日からフッと消えてしまったのだ。

その父のいつも使っていたやすの、するどいきっ先を見ると、雄吉の心に、いつもの不敵さがぐいぐいともり上がってきた。

「このやすで、おとっさんは何度大鰻と闘ったり、大章魚を仕留めたかしれないんだ。僕は、そのおとっさんの子だ」

よし、行ってみろ、と、ゴツゴツした岩にとりついて海底の谷底めがけてはいおりた。

シュウシュウと、船上の動力ポンプから送られる新しい空気が、潜水マスクへ流れこむ。

「そうだ、きょうは立花さんがポンプ掛かりをやっているんだ」

雄吉はなお元気がでた。

立花さんは、大学を出るとすぐ、海の生物を研究するために、とくに黒潮丸へのりこんだ若い理学士である。小人数なので、いざというときは皆といっしょになんでもやるのだが、雄吉を弟のようにかわいがっている立花さんは、雄吉のもぐるときは、きっとポンプ掛かりになってくれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

るのである。
「しっかり、雄吉くん、気をつけろよ」
立花さんの心が、その空気にまじって伝わってくるようだ。男らしい黒い瞳が、雄吉をのぞきこんではげますように笑っているようだ。
雄吉は蟹のようにはって進んだ。その潜水具はよく絵にある、章魚の化け物みたいなぶかっこうに大げさなものではない。純日本製のマスク式呼吸器といって、ちょうど防毒面のように、ただ顔だけ包んである。頭は水中にむき出しだし、胸から下もただの作業服で、足は普通のゴム底たびである。
こんな無造作なしたくで、外国人が三十メートルそこそこきりもぐれないのに、日本人の中には九十メートルぐらいまでももぐれるものがある。雄吉もそのひとりだ。外国人がおどろきあきれるのもむりはない。が、からだが自由なうえ、このほうが呼吸が楽なので、深海でも思う存分働けるのである。
その身軽さだ。それに父と立花さんにまもられている気持ちだ。雄吉はからだじゅうが引きしまった。
海底のあらしはいよいよはげしくなる。重い鉛帯の錘をまきつけているが、それでも油断すると足をさらわれる。
ようやく二十メートルもおりると、あ、またもやあやしい音が下で聞こえた。

「や、あの大岩の近くだぞ」
雄吉は下を見下ろした。そこにおおきな岩が、黒くどかっとすわっていた。
底流れも谷間だけに、そうひどくない。
その辺は一面の大珊瑚だ。こんな所には、あの恐ろしい蛇のようなウツボがひそんでいて、近よるものに飛びかかってかみつく。
雄吉は一歩ごとに眼をくばった。が、あらしに恐れて穴の奥にかくれたのであろう、一匹も見えない。
大岩には海藻が生い茂って、黒いほのおのようにからみあって、ざわめいていた。その海底の密林の中へ、勇敢にもずるずるとはい降りた雄吉は、ようやく大岩の上に立つと、ぎょっとしてさけんだ。
「やッ、こいつは岩じゃないぞ」

沈没船の秘密

雄吉が眼をむいたのもむりはない。この谷は真珠のとれる蝶貝もいないので、今まで近づいた

こともなかったが、さて、来てみれば、ああ、これはたしかに古い沈没船である。
雄吉は、その甲板へ立っているのである。
たいへんな発見だ。雄吉は胸が躍った。
「やッ、こいつあ、大昔の和船だぞ」
雄吉はもう一度眼をむいた。
櫓も折れ甲板も破れ腐ってボコボコの穴だらけ、まるで船の骸骨である。が、その形はたしかに古い絵で見たことのある、昔の和船に相違ない。
「こんなものがどうしてこんな南洋に……」
雄吉はゴクッとつばをのんで、ゾクゾクッと肩をすぼめた。
青や緑の大小の魚が甲板の破れ目からヒラヒラとにげだした。その姿さえ薄気味が悪い。
五十メートルの海底に、何百年となくじーっと横たわっていた骸骨船。その船体のどこからどこまで、眼に見えない煙のような妖気が立ちこめているようで、さすが不敵の雄吉も顔色を変えた。
と、おりもおり、またしてもあの奇怪なものおとが、しかも、すぐうしろから聞こえてきた。
雄吉はぎょッ、と振り返った。
ギ、ギーッ……ギ、ギーッ。
船とともに沈んだ人の魂の呼ぶ声か。うらみの悲鳴なのか。雄吉は冷や汗をたらたらと流し

た。が、なんというふしぎであろう、その足は見えない糸でたぐりよせられるように、じりじりと怪音のする方へ思わず運ばれてゆくのだった。

雄吉はなかば夢心地だった。いつの間にか船をおりて、近くの海藻の茂みへ踏みこんだ。

海底のあらしは谷底までとどいてきた。海藻がうずまいて揺れて、雄吉のからだをまきくるめようとする。雄吉は岩にしがみついてあたりを見廻した。

大きなタツノオトシゴが五、六匹、揺れる海藻にしっぽをまきつけて、じっと見下ろしている。その硝子玉のような眼が雄吉をあざ笑っているようだ。

「こん畜生、ばかにするない」

声を立てるときゅうに気持ちがはっきりした。

「なんだか、海の化け物屋敷へ来たようだぞ」

海底へ降りたのも遠い昔のような気がする。黒潮丸も高い高い空の上にあるような気持ちだ。

雄吉はやすを握りしめて海藻をかきわけた。

「やッ、なんだ、あいつは」

雄吉はのび上がった。向こうの大きな珊瑚の枝のあいだにふしぎなものが引っかかっている。青黒い鉢の形をしたものだ。雄吉は眼をすえた。

底流れが珊瑚の枝に当たった。と、その奇怪な鉢形が枝にこすれて、ギ、ギーッとうめいた。

「わかった。あやしい音の正体はあいつだ」

が、いったいなんだ、それは？　雄吉はこわごわ近よった。
「変てこなものだぞ」
がっしりと枝のあいだにはさまった鉢形を、やっとのことで取りはずして首をひねった。
潮のためにすっかり腐れて化石したようだ。が、ところどころに黄金色にまばゆく光る星がある。
「やや、や、こりゃあ、昔の兜じゃないかな」
ためつすがめつながめていた雄吉は、とうとうさけんだ。
「うーん、たしかにそうだ。ここが鍛だ。こっちがてっぺんだ。飾りの星が光ってるぞ」
のんきなやつだ、岩の上へ大あぐらだ。
「こりゃ、大変なものを見つけたぞ。大昔の和船に昔の兜、……だが、いったい、どうして、こんな所に……。なんだか、しらないが、こりゃなにかいわれ因縁があるらしいぞ。船長さんや立花さんに聞いてみよう」
学問はないが、あたまが妙にするどく働く雄吉である。たいした獲物だとばかり、細引きを取り出すと、兜を十文字にからげて首ねっこへしばりつけた。
「さあ、あがろう」
生命綱を引こうとしたときである。
「あッ、こん畜生」

雄吉はさけんだ。すぐ横手の小暗い藻の陰から、一メートルあまりもあるすばらしい大鯛が、らんらんと眼をいからして迫ってきたのだ。

鯛は潜水夫の大敵である。見つけると飛びかかる。その鋭い歯にやられたら、だいじな空気の通うゴム管なぞ、わけもなくかみちぎられるのだ。

雄吉はやすを構えた。

サーッと大鯛が飛びかかった。ピンと張った背や胸のひれが、針のようにビリビリとふるえている。

雄吉がやすを突き出した。ピチリと横にそれた大鯛が、手許に躍りこんだ。やすを取り直そうとしても、水の圧力の強い海底だ。そう軽軽とは手が動かせない。

そのすきに大鯛が、雄吉の左手にガブッとかみついた。

「くそッ」

手を振りもぎろうとするとそでが裂けた。そのきれはしを獲物とまちがえた大鯛が、スーッと浮き上がろうとする横から、突き出したやすが胴中をもののみごとに貫いた。

ビリッと大鯛が身ぶるいした。その拍子にやすがしなって、あやうく折れかかる。

「どっこい」

引きよせるはずみにやすが抜けて、大鯛は浮き上がって、灰色の底流れの中へ消えていった。

「痛い」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton